

あなたのお世話

大野町 大勝 勝

本堂の中央に、背の低いお座敷チェアが三十脚余り並び、その上にA四サイズのプリントが乗っていた。六十九歳の三沢知子は定刻の十五分程前に着き、一礼して入室した。入口に近い列の後方で、プリントを手に取り着席した。やや長身で、色白の整った顔立ちの彼女は、歳より若く見える、と、よく言われている。既に数人の男性が、中ほどで雑談していた。

此処は福井県の南部、武生盆地の真ん中に開けた静かな古都、越前市だ。地元では「武生」で通じている。市内には、正覚寺、引接寺を始め、由緒ある古寺が多い。

知子は生まれ育った此の地が好きだ。然程大きくない生念寺は市井にある、三沢家の菩提寺だ。其の日は、生念寺で、最も重要な年中行事の一つ、秋の報恩講の準備委員会が開催されることになっていた。知子は町内の門徒の中で、婦人部が当たっていた。

彼女は膝の上で、数枚画面コピーされホッチキスで留められたプリントをばらばらと捲ってみた。中に名簿もあり、自分の氏名、町名を確認した。其の後、正面の奥の薄暗い伽藍に立つ阿弥陀像の辺りを見るともなく見ていた。

世話方の男性門徒や婦人部が三三五五入ってきた。二人連れの男が入室した時、其の一人が知子の視界に入り、彼女は、はっと眼を見張った。（光夫さんだ！）知子は何十年振りかで胸がときめいた。其れは決して不整脈の症状などではなかった。彼もほんの一瞬だったが、彼女に視線を送ったように見えた。知子は急いでプリントの名簿に眼を走らせた。

「島津光夫」の文字が眼に飛び込んだ。町名も昔の儘だった。（間違いない）彼は、連れと並んで最前列の中央あたりに腰を下ろした。

予定時刻きっかりに、僧衣を身にまとった住職が見えた。門徒達の私語はびたりと止んだ。

「皆様、お忙しいところを集まって頂いて有り難う御座います」挨拶の後、プリントに従って夫れ夫れの役割、分担、集合時刻など住職から説明がなされた。島津は受付係が当たっていた。婦人部は参拝者や世話方を持て成す昼食の御齋を担うことになっている。報恩講は三日間に及ぶ行事で、説明はプリントに記載されている通りのものだった。知子は時折、斜め前方に見える島津の

姿が気になり、心ここにあらずの状態になった。

会が終了すると、知子は急いで本堂の出入り口の隅へ行き、人待ち顔で立った。退出する門徒に交じった島津を見付けると、すつと近付いた。

「こんにちは、島津さんですよ。お久しぶりです」

「やあ、三沢さん、どうも」

「此方へ戻っておられたのですね」

「はい、定年と同時に。あなたはお元気そうですね」

「ええ、お陰様で」

「旦那様もお元気ですか？」

「それが……三年前に急病で亡くなりまして……今は一人暮らしなんです」

「えっ？」と島津は絶句した。悪いことを聞いてしまったな、というような表情を浮かべた。其の時、彼の連れらしい男が近寄ってきた。島津は、

「それじゃ失礼します。お疲れ様でした」

と言つて連れと並んで立ち去った。知子は山程積もる話を胸に秘めながら、彼等の姿が見えなくなる迄見送った。

知子と島津は報恩講の出番の日が異なるので、其れ切り会うことがなかった。

知子は、島津と出会ったのが高校一年の時だった。彼女は、中学時代からやっていたテニスが好きで、高校入学と同時にテニスクラブに入った。其の時、島津は二年生ながら副キャプテンとして活躍していた。長身で、少し色黒で、欧米人系のように鼻が高く、成績は学年のトップクラスらしく、女子部員の間で人気があった。知子も其の中の一人になった。彼は自分の立場上か、三年生

のキャプテンと共に熱心に指導した。クラブの顧問は、テニスには無縁の英語教師だった。監督やコーチなどいかなかった。

島津は知子に、

「もっと腰を捻りながら体重を前足に移し、強く打つように」

と、サーブのテクニクを教えたり、また、フォアハンドストロークのアドバースなどをした。ラケットを握る知子の指に島津の手が触れた時、彼女はびりりと電流が走るように感じた。知子は他の部員から妬まれないだろうかと心配する程、彼の熱意が伝わった。

二人は練習時間以外に、テニスと関係ない会話を交わすことがあった。知子は次第に島津への好意が強くなった。彼も自分に好感を持つている風を感じられた。其れは決して自惚れではないと信じたかった。

三年生になってからキャプテンを務めた島津が、卒業を間近に控えた其の頃、テニスクラブ全員で集合写真が撮られた。前列から三年生、二年生、一年生の順に並んだ。知子は島津の斜め後ろに立った。

島津は東京の大学に進むことが決まっていた。

知子と島津は離れ離れになった。二人は時々電話で近況を話し合った。当時、携帯電話はなかった。知子の自宅と、島津の下宿の電話からだった。

知子は高校を卒業すると、地元の商社に就職した。仕事の傍ら、花嫁修業の一つと思つて、栄養士の資格を取った。更に、料理教室へも通った。

島津は大学三年の夏休みに帰省した際、知子と武生の喫茶店で落ち合った。彼は初めから、どこか重苦しい雰囲気、知子は不安を感じていた。帰り際に島津は言った。

「俺は関東で就職することになっています。将来、其処で家庭を持つ積もりです。あなたは、他の誰かと結婚してください」

其の後、二人の連絡は途絶えた。

知子は二十三歳の時、母の友人の紹介で、二つ年上の謙二と見合した。お互いに気に入って、三沢家へ婿養子にきて貰えるなら、という条件で会った。彼は地方公務員として市役所に勤めていた。真面目で、優しく、見た目は普通で、仕事は安定していて、知子は断る理由がなかった。言葉数は多くないように感じたが、「男は、べちゃくちや喋らなくてもよいものだ」と母は言った。井戸端の好きな父は耳が痛かったかもしれない。

謙二は知子と同じ程の背丈だ。知子はハイヒールを履くと、若干彼女の方が高くなる。知子は、なるべく高い靴を履かないようにした。

二人は、三箇月程交際して結納を交わし、其の二箇月後に挙式した。知子は両親から、

「お前は此の家の跡取りだから、いい婿さんを見付けて連れてこいよ」

と、適齢期になる前に言われた。一人娘の彼女は、其れが自分の宿命だと承知した。

「此れで三沢家は安泰だ」

と、両親は喜び安心していた。後は孫の誕生を楽しみにしていた。

謙二は三沢に姓を変えた。職場などでは人知れぬ苦勞もあったことだろう。知子も両親も彼に感謝し気を遣っていた。知子は仕事を辞め、専業主婦になった。彼女は栄養の点でも謙二の健康管理に気を配った。

知子には、なかなか子宝が授からなかった。積極的に診察を受け、医学的に対策を講じよう、という発想は彼女にも謙二にもあまりなかった。

子育ての終わった夫婦は、子育て中と同じように、「パパ」、「ママ」、「お父さん」、「お母さん」などと呼び合うことが多い。子供のいない知子と謙二は「謙さん」、「知さん」と呼び交わしていた。

知子は時時、テニスクラブの集合写真の島津を見ることがあった。色んな想念が頭を過った。心の中で島津に話し掛けることもあった。(…光夫さん元氣？ 幸せにお暮らしですか？) 其れは家具の少ない部屋で掃除機を掛けている時、雑巾掛けなど単純作業の時、湯船に浸って、ぼーっとしている時などだった。其の都度(謙さん御免！)と謝った。

知子は野菜類を買う時、必ず数軒先の武屋青果店へ行った。スーパーマーケットでも買えるのだが、青果物だけは武屋を利用した。其処の品物は安くて美味しくて新鮮なのだが、其れだけ理由ではなかった。二代目で、知子と同年代の店主は、何所となく島津に似ていて親近感を抱いていた。先代の頃から彼女は母に連れられて買い物をしていた。二代目が年を重ねていく姿、面構えを観察しながら島津を思い浮かべていた。

知子が五十二歳の時、孫の誕生の叶わないことを心残りにしながら父母は相次いで他界した。謙二は立派に喪主を務めた。親族や町内の人の外、市役所の関係者も多数参列して呉れた。

謙二は、こつこつと正確に業務を熟していたようだった。部長以上に出世するような遣り手ではなかったが、それでも定年二年前に課長代理に昇進した。高卒ながら見事なものだと、知子は彼の努力を労い、敬服した。

謙二は定年退職後、共済組合の年金生活になった。彼は地域の行事に進んで参加したり、また、以前から興味を持っていたらしい謡曲教室へ通ったりしていた。

謙二は家事が苦手で、自発的に手伝うことはあんまりなかった。知子は彼に出来るようなことをなるべくやって貰うようにした。もし自分にお迎えが来て、謙二が後に残された時、少しでも役立つことを経験しておいた方がいいだろうという思いからだっただ。

「知さんは絶対、僕の先に逝ったら駄目だよ。僕は一人で生きる自信がないんだから。独居なんて地獄みたいなものだ。想像しただけでも、ぞっとするよ」
其れは謙二の口癖だった。

知子が六十六歳の時、夕飯後にソファで寛いでいた謙二が、突然「うっ！」と悲鳴を上げて倒れ込んだ。救急車で搬送された病院に着いてから、二時間後に息を引き取った。心筋梗塞で、あまりにも呆気ない最期だった。

知子は遺族共済年金生活となった。平穩に過ごせるのは、謙二のお陰だと彼に感謝している。

其れまで、知子は家事の合間に、謙二のベストや帽子などを毛糸で編んでいた。其の後は膝掛けなど、自分で物を編むようになった。

大抵ソファでラジオを聞き流し乍らだった。ニュース、音楽、天気予報、有名人のトーク、リスナーからの投稿、電話人生相談等、何か音が聞こえると、社会との繋がりが、より深くなるような気がして安心感を味わえた。テレビだと手元から眼が離れてしまい編み物は出来ない。ラジオ離れしている年代があると聞いた

が、彼女は、有益なラジオ放送が何時迄も存続して欲しいと願っている。

知子は一日に一回以上、謙二の遺影の前に座って話し掛けた。

（謙さん、今日も一日無事終わりました、有り難う）

謙二が彼女の先に果てたことは、彼の本望だったろう。恐怖さえ感じていた一人住まいをしなくて済んだのだから。此れで良かったのだと知子は思った。もう一つ思うことがあった。彼女が、もし謙二より早く病床に臥し、息が絶える寸前に、朦朧とした意識の中で「光夫さん」なんて口走ったりしたら謙二は何と思うことだろう。其の心配は解消された。

知子は謙二の月命日には、彼の好きだったリンゴやブドウなど、旬の果物を供えた。其れらは武屋で購入したものだ。店主は三代目に変わり、二代目は補助に回っていた。彼の顔の皺や染み、それに自分と同じ位に髪に白いものが混じっているのが眼に付いた。彼女は其処から島津を連想していた。

生念寺から帰った知子は、謙二の遺影の前に座った。（謙さんの知らない人だけど、今日、久し振りに光夫さんに会ったの。胸が一杯になったわ、謙さん御免ね）

生念寺の報恩講が終わってから一週間程経った時、知子に島津からの手紙が届いた。

（こんにちは。先日は声を掛けてくださって有り難うございました。とても懐かしかったです。私は本堂に入った時、直ぐ、昔の面影が其の儘残っている貴女に気付きました。）

私は二年前、妻に癌で先立たれ、今は一人、父が遺して呉れた実家で、厚生年金生活になっています。長男が自分のルーツの福

井県に親しみ、鯖江市で家庭を持っています。時々様子を見に来て呉れていますので心強く思っています。孫息子は大学に入ったばかりで東京に住んでいます。

家事は想像以上に大変なものだと実感しました。長男の嫁さんの指導を受けたこともあり、何とかやっています。健康の為と思つて庭で家庭菜園を手掛けています。認知症の予防になるかと思ひ、囲碁も楽しんでいます。

長男は同居を勧めて呉れていますが、私は独立している彼の家庭に迷惑が掛かると思ひ、今は断っています。

私は一人息子なので、大学時代、二親から「あんたらは一人っ子同士だから結婚出来ないんだよ」と言われていました。貴女と別れることを決意した頃随分苦しみました。当時は家と家とを結ぶものが結婚だったようですから、此れも自分達の運命だと諦めなければなりませんでした。

今はお互いに元気でいられることに感謝し乍ら過ごしていきたいと思います。

(携帯)〇九〇―……

知子は其の手紙を、力の限り抱き締めた。衝動に駆られた。即刻電話したかったが、何をどう話したら良いか頭が混乱していた。謙さんがあれ程恐れていた一人ぼっちの生活を今、光夫さんが余儀無くされている。何とも遺る瀬無かった。

彼女は落ち着いて、気持ちを整理し、今一番話したいことを念頭に置いて翌日電話した。

「もしもし、三沢です。今、電話いいでしょうか？」

「ええ、大丈夫です」

「お手紙有り難うございました。奥様がお亡くなりになられていること、初めて知りました。本当に御愁傷様でした」

「どうも、ご丁寧に、有り難う」

「私の電話番号言いますね。〇九〇―……」

彼女は島津がメモを取り易いように、ゆっくり言った。彼が念の為復唱したのを確認してから知子は続けた。

「私は子供が出来ませんでした。頑張ったんですけど」

(頑張ったなんて、余計なこと言ってしまったかしら)と、知子は年甲斐もなくほんのり頬が赤らんだ。テレビ電話でないから、島津には分からない。

「そうだったんですか」

彼女は最も重要な要件を切り出した。

「…あのう……身の回りにこと、何かしましょうか？」

「……うーん、気持ちは嬉しいのですが、息子達の手前、其れは困ります」

《息子達の手前》、子供のいない知子にとって思い及ばない言葉だった。彼女は胸を刺される感じだった。

其の後、二人は週一回程電話した。取り止めない世間話で、高齢者同士の安否確認にも似ていた。(車で二十分余りの所に光夫さんが居るのに……)と、彼女は次第にもどかしさが募った。

知子は何故か、もやもやとした感情を消すことが出来なかった。彼女はラジオの「電話人生相談」の番組を思い出した。其れは住所、氏名を伝えなくてもよく、其の上、音声が変わえられていて、相談者本人を特定出来ないようになっていた。知子は電話を掛ける前に、相談内容をメモ用紙に書いてみた。

《六十代女性・子供なし・主人を見送り一人で生活・高校時代から好きな人がいるが、独子同士で結婚出来ず、其れ其れ別の人生を歩んだ・最近、偶然再会し、彼も伴侶と死別し独居と知る・

今は携帯電話で話をしてる・彼の身の回りの世話をしたいと申し出たが「息子達の手前困る」と断られた・好きな人のお世話をさせて欲しいと望むのは悪いことなのではないか？」

知子は電話を掛けた。録音テープからのように「少々お待ちください」という案内の後、女性アナウンサーが、

「お待たせしました。どのような相談でしょうか？」

と応じた。知子はメモ紙を見乍ら、要領よく簡潔に悩みを語った。アナウンサーは言った。

「では、〇〇先生と代わります」

代わって電話口に出たのは、男性の声だった。

「〇〇と申します。お話を伺っていて、長い長い、こういう恋もあるのかと、映画でも見ているようで羨ましくなりました。お二人の気持ちは良く分かります。あなたが彼のお世話をさせて欲しいと願うのは悪いことではありません。でも、好きな彼の思いも尊重しませんか。彼も、あなたの申し出を嬉しく思い、今の儘で十分幸せだと思っている筈です。」

あなたは、滅多にない、幸せな世界にいる特別な人です。此の儘の形を長続きさせるのが最良だと思いますよ」

知子は、普通の人になかなか手にし得ない幸せな世界にいることに気付かされた。(そうだ、私は幸せ者なのだ) 彼女のもやもやした感情は薄らいでいったような気がした。

数週間後、知子は介護士の資格を取得したいと思い、市役所の福祉課へ行って相談した。

規定の講習を受け勉強した。此の年になってスキルアップしようとは思ってもいなかった。どうにか、試験に合格した。

知子は島津と電話していた時言った。

「私を家政婦として、平日に週二回程使って頂けませんか？」

午後一時半頃から二時間程度。私、栄養士と介護士の資格があるんです。料理も好きです」

「家政婦？ 何か経済的に困りなんですか？」

「……ええ……ちよつと、時給は世間相場の半分程頂きたいのです」

彼女が初めて島津に嘘を吐いた。彼は遺族共済年金や、一人の生活費位見当が付いている筈だ。その上で、知子が嘘を吐けるように質問したのでないだろうか、と彼女は思った。

島津は少し間を置いてから言った。

「長男とも相談してみるよ、老いては子に従え、でもないけど」

数日後、島津から電話があった。

「今度の週末に長男がくるんだが、都合が付いたら此方へ足を運んで貰えませんか？ あなたのことは、高校のクラブの後輩で、先日、生念寺でたまたま再会し、今は一人暮らしの未亡人と知った。栄養士と介護士の資格を持っている。週二日、平日の昼間二時間程度家政婦として働かせて欲しいと頼まれている、と話してあります」

土曜日の一時半頃に、と約束し、知子は地味な黒いパンツとグレーのコートを着、白い軽ワゴン車で島津の家へ行った。彼と会ったのは、生念寺での再会以来だった。応接間に通されると、島津は言った。

「此方は長男の鉄矢、それに妻の瑛子さんです」

其の後、島津は知子を紹介した。鉄矢は島津の若い頃とよく似ていて、一目で息子さんと分かった。瑛子は明るく、垢抜けした

感じだった。コーヒーを飲み乍ら暫く雑話していた後、瑛子が言った。

「どんな方かと気になっていたけど、良かったわ、お義母さんとは何処かよく似た感じで。それに栄養士と介護士の資格をお持ちで頼もしいわ。私達も安心だし、お義父さん、三沢さんをお願いしましょうよ」

と、島津に言ってから鉄矢に向かって「ねえあなた」と同意を求めた。彼は「そうだな」と頷き、

「御手当は、三沢さんとお父さんで決めたらいいよ」

と、付け足した。島津は息子夫婦に従えばよいと思っている風だった。知子は面接試験にパスしたような心地だった。

翌日、知子は文房具店で、ストラップの付いた名札ケースを購入し、中に氏名の外、栄養士・介護士と記載して挿入した。

知子は車を冬タイヤに替え、十二月の初めから、月曜日と木曜日の午後一時半より二時間、島津の家で家政婦を勤めた。家政婦の制服らしい装いで家を出る時、首から名札を下げた。其の間から家政婦としてのスイッチが入った。ぶら下がった名札が邪魔になる作業の時だけ、ストラップは付けた儘、名札だけ胸のポケットに仕舞い込んだ。

彼女の主な仕事は、其の日と次の日の分の島津の夕食の料理、バス・トイレの掃除、時間に余裕がある範囲で空いた部屋の掃除などだった。其の間に島津の指示があれば、宅配便の受け取りや来訪者の取り次ぎや対応もした。

知子は、早めに消費しなければならぬ食材の有無を島津に確認し、献立の予定を話し、近くのスーパーマーケットへ材料を買いに行った。彼にレシートを渡すと、帰り際には現金で返して呉れた。

知子が家事をしている間、島津は庭の家庭菜園へ出たり、囲碁の本を読んだり、録画した囲碁のテレビ番組を再生して見ていることがあった。

島津の知らない料理を手掛ける時、彼は側に来てノートに手順をメモしていた。其のノートは、瑛子から家事の要領を習った時記録していたものだそうだ。

島津は、囲碁関連の会合や大会などのために外出することがあるので、玄関の合鍵を知子に預けた。

彼女は帰宅すると謙二の遺影の前で、（只今。今日の家政婦の仕事、無事終わりました）と報告した。

名札を外し、ホームウェアに着替え、リビングで寛ぐと（光夫さんのお世話が出来た）という幸福感が沸騰と湧いた。「電話人生相談」の後、もやもやした蟬りが薄らいだような心情になったが、今は百パーセント晴れ渡っていると思った。此の幸せが何時迄も続くことを願っていた。

知子は御近所さんから何か聞かれたら「ちよっとパートに出ています」と答える積もりだった。

大して積雪もなく、四箇月過ぎて春になった。島津の話では、鉄矢夫婦が訪ねてくる頻度は、以前と変わらないそうだった。もし、彼らが島津から足が遠退くようになったならば、知子は罪悪感を抱くことになっただろう。

ある日、島津が知子に言った。

「鉄矢が三沢さんに話があるというのですが、今度の土曜日、時間があつたらご足労願えませんか？」

鉄矢さんから話、何だろう？ 知子は気になり落ち着かなくなった。自分では意識しないで、何か不始末を仕出かしたのだから

うか？ それとも妙な噂でも流れて迷惑しているのだろうか？

意地悪い、陰湿な輩が作り話をまことしやかに広めることがあるものだ。「多分」で始まり、最後に「：知らんけど」と締め括って責任逃れする。幸せで充実した四箇月だったが、もう終わってしまうのだろうか。

知子は約束した土曜日の午後一時半に島津の家に着いた。瑛子も交えて三人が応接間で待ち受けていた。知子の緊張は、ピークに達した。

鉄矢が言った。

「何時もお世話様です。私共で話し合ったのですが、もし、父のこと嫌いでなかったら一緒に住んで欲しいのです。考えておいて頂けないでしょうか？」

知子は予期していなかった話に、突然、思考力が止まってしまったようになった。彼は続けた。

「あなたが見えるようになってから、父はとても生き生きしてきました。是非、此れからの父の人生のパートナーとなって欲しいと願っているのです。良い御返事を頂けましたら、後は入籍されるかされないかを二人で決められたらいいと思います」

瑛子が言った。

「私からもよろしく願います。お義父さんのことを三沢さんにお任せします、という訳ではなく、私共は今迄通り顔を出し、高齢者には無理な用事でもあれば何時でも対応します」

知子にとって夢のような話だった。諸手を挙げて喜びたいところだった。が、其の気持ちをごと抑え、神妙に言った。

「少し考えさせて頂いてから御返事します」

即答出来ないような素振りをみせた演技を島津は見抜いていただろうと知子は思った。

一箇月後、知子は島津との同居を承諾する返事をした。

五月の初めから、知子は島津と共に暮らした。「嫁ぐ」ことの感覚らしいものを初めて味わった。二階の南側の部屋が、彼女専用に宛がわれた。其処は押し入れとクローゼットを別にして十畳の広さがある。リビング用より少し小画面のテレビや、机、ソファなどが置かれている。知子は、謙二のスナップ写真をフォトフレームに入れて机の上に立てた。

ラジオや編み物の道具なども其の部屋に収め、暇な時、其処で過ごしている。島津と二十四時間、べったりしたいのが本心だが、ソーシャルディスタンスなどとは関係なく、少し距離を置く時間もあるとお互いに良いような気がしている。

島津は、知子を籍に入れて、安定した立場にしてやりたいようだ。しかし、知子は後後のことを考えて、其れを望んでいない。入籍すると遺族共済年金はどうなるのか、というような知識はないし、調べてみたいとも思わない。他に面倒な諸手続きなどあっても御免被りたい。入籍のメリット、デメリットがあるだろうが、興味はない。

知子は土曜日、日曜日、祝日、謙二の月命日、島津夫人の月命日などには実家にいるようにしている。「里帰り」というものを実感出来た。家の空気の入替え、掃除、数は少ないが、郵便物の確認などしたい。其れに何より、島津が親子水入らずで過ごせる日を設けておくことが大切だと考えている。更に、島津が折角習得した家事の能力を錆びつかせてはいけないという思いもある。謙二の月命日には、彼を偲びながら静かに過ごしたい。島津も奥さんの月命日には、同じようにして欲しいと思っている。

知子は、謙二との思い出の詰まった生家を元氣な間、維持管理する積もりだ。其れが儘ならなくなった時は、島津家も含めた親族の中で希望する者がいるならば譲りたいと考えている。

島津は、知子の何でもない家事に、「有り難う」と、よく言う。食事の後に、「美味しかった、御馳走様」と言われるのが、知子の大きな喜びだ。彼は、主婦の家事の有り難みというものを、身を以て痛感している風だ。

二人は、お互いにアルバムを見せ合い、此れ迄歩んできた別別の人生を理解しようと努めた。島津も、テニスクラブの集合写真を大切に保管していた。知子は今、幸福度が二百パーセントだと感じている。彼女は、独身時代、島津と交際していた事実を、二人で墓場迄持つていくことになるだろうと思っている。

知子は、「内縁」「通い婚」「茶飲み友達」という言葉を知っている。特に気に留めたことはなかったが、今は何と味わい深い表現だろうとしみじみ感じている。

知子は、何時か、何方が先に逝くか分からないが、島津との永遠の別離に遭遇しなければならぬだろう。が、其の時迄、心身共に健康を維持し、幸せを噛み締めていきたいと思っている。

知子は若い頃、西川峰子という歌手の「あなたにあげる」という歌を聞いたことがある。

へ♪：あなたにあげる、私をあげる、あーあーあなたの私になりたいのー何と一途で、情熱的で、刺激的で、いじらしく、激しく、健気な歌詞だろう。此れを作詞した千家和也氏とはどんな方なのかと思つたものだ。彼女はあの歌を今思い出しても、気持ちに昂ぶることはない。ただ、最後のフレーズへ♪：あーあーあなたのお世話が好きなのよーと替えたい心境だ。

た。それが予兆であつたかのように、陽子からの連絡が途絶えた。

その日を限りに、全く梨の礫であつた。

宗之は「あの接吻に及んだ行為が悪かつたのか」と、悶々とした日を送った。

夢うつつに、美しい陽子の顔が浮かんだ。

知的で意志的な、水平に真つ直ぐな眉。

繊細で優しい、ぼつちりした二重の目。

ずっと鼻筋が通る、彫りの深い顔立ち。

藤田嗣治の絵みtainな乳白色の透明な肌。

写真はなくても、面影は鮮明に浮かんだ。

宗之は、熱い告白の手紙を書いたが、返事は貰えなかった。最早、諦めるしかない。

そして、この恋は終わった。(第一章)

田原省吾が書いたのは、七章にわたる長篇だつた。その物語は、タイトルの「with M・M」がキーワードとなる推理小説である。

作者は、小説の魔術で読み手を惑わす術を知っていた。だから雅彦は、第一章を読むうちに落ち着きを失くし、慌てることになる。

まず、自分と宮岡響子のアリバイを目撃証言しているような設定に驚いた。事実を化粧し、膨張させて、小説の妙が生きていた。

蓮池陽子は宮岡響子そのものだが、知性やセンスある前園宗之は、自分とは大違いだ。

現に、自分は自信が無く、告白の手紙すら書けなかった。まして深大寺のような恋物語は、したくても出来ないシナリオである。

学生の自分は、夢心地で響子に会つてはいたが、恋する気持ち

に気付かずにはいた。

連絡が途絶えた時も、寂しいとは思つても恋しくて悶々と悩むことはなかった。つまりは、単純に美しい女性に憧れただけだつた。

例の文庫本を見たり、その息子に会つたりして宮岡響子を追想したが、恋に臆病な雅彦は、直ぐ、現実に戻されて夢も醒めた。

雅彦は、感動した映画は、エンドロールを見届けて漸く「完結！」とする主義である。

だから今、村野光子のことも宮岡響子のことも皆、一部始終を思い出しながら「完」の文字を見届けることにした。ふたりのことは、もう二度と反芻しないと固く心に決めた。

エンドロールのBGMだけが耳に残った。

今、雅彦の妻は、闇の病を彷徨っている。

よく、夫婦関係を空気のような存在と言うが、互いに息遣いの熱さや匂いを感じなくなると、息は苦しく、自然な呼吸ができなくなるものである。それでも、男というものは、とかくその不協和音に気がつかないでいる。

雅彦も、何事もなく平穏だから、わが家は円満だと思い込んで、何となく生きてきた。

妻を裏切る勇氣もなかったが、積極的に心から愛したという実感もなかった。

もしかして、妻が姑への反目を通したのは歓迎されない嫁の抵抗ではなく、心から愛をくれない夫への面当てだったのかもしれない。

カーテンに縋るように、窓の外を見ていた道子を、雅彦は後ろ

から静かに抱いてみた。

一瞬「うっ」という声を漏らした道子は、雅彦に体を預けるように傾け、目を閉じた。

陽の明るいうち、立ったまま道子を抱きしめることなんて、思えば、初めてである。

雅彦の胸は、ときめくように高鳴った。

先刻までいぶかしげな顔をしていた道子の顔が、静かな笑みで膨らんでいく。

夫だと分からなくても、気持ち伝わらなくても、こうしてやるだけでいいのだ。

目をみつめ、自分を余り主張しなかった道子の「生きがいは何であつたのだろうか」と聞いてみた。勿論、答えがある筈がない。

だが「母であり妻であつた」と言わんばかりに唇を噛んで、紅潮する道子の顔を見た。

「不甲斐ない旦那で悪かつたな」

そして雅彦は、その道子と並んで、慣れないスマホの自撮りをしてみた。

自信がないから、何枚も撮ってみた。

心虚ろな童女と禿頭の髭仙人というツーショットは、おかしな組み合わせだったが、それをタブロイド判に拡大コピーしてみた。

雅彦は、捨てずにいたモンブランの万年筆とインク瓶を取り出しにかかった。

朝早く、その写真に、雅彦と道子の頭文字を並べて「with M & M」と書いた。